

公益社団法人富山青年会議所

2018年度理事長所信

理事長 牧野 裕一郎

イメージする、その先の未来のために。

～誰もがいきいきと暮らせるまち、とやまの創造に向かって！～

【はじめに】

1952年4月、戦後間もない復興期に、県内52名の青年による高い理想と溢れる情熱、そして固い友情のもと、富山懸青年会議所は設立されました。それから65年もの間、「明るい豊かな社会」の実現を目指し、多くの先達が真剣に議論し、汗を流し、とやまのために活動をしてこられました。いつの時代にもそこには大きな理想を描き、青年らしく潔く、いきいきと活動する姿があったに違いありません。

とやまの未来を考えたとき、自分自身の5年後、10年後の姿を考えたとき、あなたには明確なイメージがありますか。このとやまと、あなたの会社や家族と、そして自分自身と真剣に向き合っていますか。何かを実現させるためには、まずは物事に対して真剣に向き合い、その実現した姿をイメージすることが必要です。自分の理想とする姿を強く想い描くことで、それが行動へと変化し、現実となって形づくられていきます。つまり、イメージのその先にしか、求める未来はやってこないのです。自分自身にしかもてない、その起点となるイメージを明確に描くことで、何をしなければならぬかが具体的となり、次なる行動へとつながっていくのだと私は考えます。

まちのために、子どもたちの未来のために、そして大切な誰かのために、すべての人がいきいきと自分らしく活動している姿で溢れていること、それが私の理想とするまち、理想とする組織です。自分らしい、自分にしかもてないイメージを描き、その実現に向け、積極的に行動していきましょう。

【選ばれる^{まち}地域の実現に向けて】

私たち富山JCは、創立60周年を迎えた2012年より「とやまの10年先未来ビジョン」を掲げ活動しています。この未来ビジョンは、「小さな子どもからお年寄りまでもが同じ地域に暮らす一員として、お互いの世代を尊重し、支え合う、調和のとれた社会」、「学びたいと思えば学べる、^{まち}地域のために活動したいと思えば活動ができる、自らを成長させたいと思えばその機会が提供されている^{まち}地域」、すなわち誰からも暮らしたいと思われる「選ばれる^{まち}地域」を目指すための、私たち富山JCの行動指針です。2017年に65周

年の節目を迎え、今後はその集大成に向けて、確かな実績と結果を残すものとしていかななくてはなりません。

2019年秋には「公益社団法人日本青年会議所 第68回全国大会富山大会」が開催されます。私たちが目指す「選ばれる^{まち}地域」の実現に向け歩みを加速させるためには、全国大会の主管は絶好の機会であることは言うまでもありません。本年度は、2017年度に広げた様々な可能性を、2019年度に向けてより緻密な計画に落とし込むことが求められます。

主管を志した2014年度から見ると、2019年度には半数以上の会員が入れ代わることとなります。立候補した当初の想いを紡ぎ、富山JCが一丸となって行動していくためには、今一度足元を見つめ直し、主管する意味や意義を見出すことはもちろんのこと、LOMで行っている運動の延長線上に全国大会を位置づけることが必要です。そして大会の主管や、主管した後の姿を一人ひとりがより具体的にイメージし、そのイメージに近づくよう大会構築に向けて行動していかなければなりません。更に、市民の皆様や行政、シニア会員との連携をより強固なものとし、大会構築のプロセスそのものと、大会のイメージを共有していく1年としていきます。

【会員拡大は永遠のJC運動】

富山JCは65年もの間、「明るい豊かな社会」の実現を目指し、様々な運動を展開してきました。40歳で卒業するJCという組織において、共に活動する新たな仲間がいなければ、JC運動の継続や組織の持続的な発展は望めません。まずは私たちがJCの魅力を深く理解し、自分たちの運動や活動を一人ひとりの言葉で伝えていくことが大切です。その上で、自分本位ではなく、相手の立場に立ってアプローチしていくことが必要となります。これまで多くの先輩方がここで学び、仲間と共に汗をかき、地域を牽引するリーダーとして現在も活躍されています。つまり、会員を拡大するということは、私たちの運動の発信力をより高めていくばかりでなく、このとやまを想い活動していける、未来のリーダーを増やしていくということにつながっています。会員拡大は永遠のJC運動なのです。

会員拡大に正解や近道は存在しません。会員一人ひとりが常にこの組織と未来のとやまへのイメージをもち、JCの魅力を自分の言葉で語るようになれば、必ず仲間が増えていきます。一生の友と呼びあえる存在が一人でも多くつくれるように、相手の心に寄り添い、地道に拡大活動を続けていきましょう。

【強い組織づくり】

人は自分以外の誰かのためを思うとき、本来の力あるいはそれ以上の力を発揮することができます。そしてその力が合わされば、一人ひとりの力は大きな組織の力となって、あらゆることに挑戦していけるのではないのでしょうか。人と人とのつながりを大切にし、更に絆を強めていくことで、より一体感のある強い組織となるのです。

「J Cの仲間は皆信じあう」若い我等の一節です。恥ずかしげもなく同志と呼び、信じあう仲間がいるということは、J Cの大きな魅力の一つです。この富山J Cというフィールドで出会い、現代という時代に活動を共にできる仲間は、かけがえのない財産となります。お互いが相手のことをおもいやり、助け合える仲間感謝し、これからも高め合う関係を築いていきましょう。その仲間との絆こそが、大きな挑戦への原動力となるのです。

また、富山J Cには1, 0 0 0名近いシニア会員が存在し、私たちの運動・活動を支えていただいています。これまでの先達の足跡に敬意と感謝の心を持ち、積極的に交流を深めていきましょう。そして同時に、私たちの想いをしっかりと伝え、その想いを共有できる関係を築いていきましょう。

会員同士の横のつながりと、シニア会員との縦のつながりが合わされば、それが固い絆となります。その絆があればこそ、自分たちのイメージを実現できる、より強い組織になれると信じています。

【若者たちにまちへの愛着と誇りを】

日本は人口減少時代に突入し、特に生産年齢人口の減少という危機に面しており、このとやまにおいても例外ではありません。富山市の人口は2 0 6 0年には約2 9万人まで減少するという推計もあり、人口減少は消費市場規模の縮小にとどまらず、深刻な人手不足、地域経済の縮小、またそれにより更なる人口減少を招くなど、負のスパイラルに陥る可能性があります。近年は社会増の傾向にあるものの、Uターンなどをする若年層を更に増やしていかなければ、今後の人口構成に大きく影響を及ぼす事態となっています。

とやまを「選ばれる^{まち}地域」として、長期的に持続可能なまちにしていくためには、若者たちのまちへの愛着や誇りを育み、一旦進学や就職によりとやまを離れても、再び地元で住み暮らしたい、まちのために活動したいと思う気持ちを醸成することが必要です。とやまのまち、人、しごとについて、一人でも多くの若者に愛着と誇りをもってもらい、未来の自分の姿をイメージできるよう、私たちが企業人として、地域の大人として関わっていきましょう。

【まちづくりにおけるJ Cの役割とは】

私たちが住み暮らすこのとやまには、豊かな自然やそこから生まれる水資源を背景とした産業、食文化、素晴らしい人間性など、世界に誇れるものがたくさんあります。先人から受け継がれてきたこれらの文化は、これからも後世に伝えていかなければならない、かけがえのない財産であることは言うまでもありません。一方で、まだ自分たちが気づいていないような魅力や、まちをより良くしようと活動している人たちが、このとやまにもたくさん存在していることを見過ごしてはいないでしょうか。

今後も魅力ある、そして誰からも暮らしたいと思われる「選ばれる^{まち}地域」を創造していくためには、これまでに根付いた文化に加え、新たな価値を創出していくことが大切であ

り、多くの市民の力を結集し広めていくことが必要です。その役割を担えるのは、J Cであると私は考えます。活動したいと思えば誰もが参画できる、いきいきと活動できる場が用意されている、私たちはそのような機会を創っていく存在にならなければいけません。まちのために活動している人たちを発掘する、人や組織をつなぐ仕組みをデザインする、新しい価値が生まれていく、このより良い連鎖をつくっていくことこそ、私たちが取り組むべきまちづくりの形なのです。

【子どもたちに多様性に対する寛容な心を】

グローバルな人材と言え、数年前までは海外で仕事をしている人、もしくは外国人を相手に仕事をしている人などが多数でした。逆を言えば、海外へ行くことの少ない人からすれば、多様な価値観に触れることは身近な存在ではないのが現状ではないでしょうか。一方で生産年齢人口の減少に伴い、国内外問わず多様な労働力が必要となる時代になりつつあります。また、インバウンドによる交流人口の増加も更に加速していくことから、次世代を担う子どもたちにとって、日本にいながらも異なる文化や価値観と共存することが、ますます求められる時代となっていきます。

子どものころから自分と違う価値観に触れ、多様性に対する寛容な心を育むことは、子どもたちの世界観を広げる上で必要になってくると考えます。親からや学校教育では得ることができない経験は、単なる学びではなく「気づき」を生み、それが後に自分を突き動かす核となり、新しい概念を生み出すことができる人材へと成長していくことでしょう。自分らしい未来へのイメージをしっかりと描き、多様な価値観の中でもいきいきと活躍できる、そんな子どもたちを育成していきましょう。

【健全な組織運営と広報戦略によるブランディング】

公益法人制度改革に伴い、富山J Cは、2012年7月に公益社団法人として新たにスタートしました。今後も市民の皆様の負託と信頼に応え、公益性と透明性に優れた組織として法令を遵守し、財務の健全性を保つよう努めていかなければなりません。一方で丸5年が過ぎ、制度改革が求める公益性と、私たちが受け継いできた組織運営や事業のあり方との間に一致しない部分があるのも事実です。今一度、他の都道府県の判断基準を調査しながら協議を重ねていくと共に、より良い形での組織運営を模索していかなくてはなりません。

健全で信頼される組織であるために、改めて自分たちの組織のあり方や運営方法を見直すことも大切です。ICTやIoTが企業に積極的に取り入れられ、働き方改革が叫ばれる昨今、一企業人である私たちが、積極的に組織の改革にあたることも必要です。当たり前や慣例になっていることはないか、新たに取り組める部分はないかを検証し、見直すことで、より良い組織としていきたい。健全で信頼される組織であること、それは富山J Cの価値を高めることにもつながるのです。

富山 J C の価値を高めていくためには、戦略的な情報発信も必要不可欠です。日本での SNS の利用者は、2018 年末には 7,500 万人に達すると見込まれています。まさに 1 億総情報発信社会となるのを目前に控え、たったひとりの発信が多くの人々の共感を呼び、社会を動かすこともできるようになったと言えます。私たちの運動をより多くの方々に知っていただくためには、発信する情報の正確性や適切なタイミングが求められるのはもちろんのこと、あらゆるコミュニケーションツールを駆使し、私たちの運動をより広く発信できる方法や拡散する仕掛けを考えていかななくてはなりません。これまでの形や方法にとらわれることなく、共感が共感を呼べる情報発信を行っていくことで、富山 J C のブランディングにつながっていきます。

【イメージをもつということ】

私が J C に入会し、これまで活動してきた中で、様々なリーダーと出会うことができました。理路整然と皆を説き伏せる人、人の心に寄り添い熱く語りかける人、無口だが背中を示す実行力のある人、豪快だがむしゃらに突き進む人。様々なタイプのリーダーに同じく言えることは、それぞれが思い描く、覚悟とも言える確固たるイメージをもっていたことでありました。そのイメージが周囲を巻き込み、実現させていく姿を見ているうちに、自分もこうありたいと思うようになっていました。

自分の未来をイメージできるのは、自分しかいません。自分が思い描いたイメージ通りに、人生は彩られていきます。単年度制ではない、自分自身の人生。おもいきり大きなイメージを膨らませ、自分らしく、果敢に挑戦していきましょう。

イメージする、その先の未来のために。

まちのため、子どもたちの未来のため、大切な誰かのために、
目を背けずに真剣に向き合うからこそ、物事の本質が見えてくる。
求める未来の姿が見えてくる。

そのイメージが明確であるからこそ、次なる行動が見えてくる。

自分らしい、自分にしかもてないイメージを描こう。

誰もがいきいきと暮らせるまち、とやまの創造に向かって！